
IS -隊長補佐の憂鬱-

偽桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - 隊長補佐の憂鬱 -

【Nコード】

N5945Y

【作者名】

偽桜

【あらすじ】

「こんな壊れた僕だけど、まあまあ幸せです」

これは、少し壊れてしまったオリ主「御刻 礼衣」がIS世界に転生し、ドイツ軍でゆらゆら生きていくおはなし。

「一夏」……よし、なんかそれっぽくできた」
「礼衣・ラウラ」これ書いたのお前かよ！」

作者が初心者&割と文才がないです。

第一話 プロローグ（前書き）

初投稿です。

テストなので若干短いです。

第一話 プロローグ

~~~~~

ガ……………ガ……………ガガ……………

それは心の削れる音？

ガ……………ガ……………ガ……………

それは心の最期の叫び。

ガ……………ガ……………ガ……………

誰かと自分の赤いナニカで染まった体は、もう少しも動かないけれど。

… ガ …

ナニダも流せないほど、僕の心は磨り減ってしまったけれど。

ガ

それでも、最期に、叫びたい。  
それが絶対聞き届けられないとしても。

……………イキタイ……………

~~~~~

さて、突然で申し訳ないとは思っけれど、僕「御刻 礼衣（みとき
れい）」は転生者だ。

…オーケイ、その「いい精神病院紹介してあげようか？」みたいな
目線にはもうなれているから、怒るなんてことはしない。

でも、実際記憶として頭のなかにあるんだから、仕方無いだろう？

前世で普通の高校生として生き、死ぬ直前学校内で殺し……………いや、
あの時の事はもう思い出したくない。

で、死後何か白髪の老人みたいなのが出てきて、テンプレの如くチ
ート能力を貰ってこの世界『IS>インフィニット・ストラトス<
の世界』に来たって訳。

因みに貰った能力は、サブリ無しで『ヴィークル』に乗れる能力と

全体的な身体能力強化。何か「役に立つ物なら何でもいい」とか言ったらこうなった。

…というか『ヴィークルエンド』とか、妙にチヨイスが渋い。おかげで生活には苦労しないし。

ま、そういう訳で、今は中学一年生の夏休みである。
せつかくの夏休みなので、僕は株取引で手にいれた某航空会社の株主優待券（配当でもらった）でドイツへ海外旅行をしている訳だ。
一人で。

…こつちの世界での両親には気味悪がられて中学に入学すると同時に独り暮らしさせられたからなあ　まあいいけど。

さて、何で僕がこんな現実逃避みたいな自己紹介を誰かに語っているかと言つと。

「……………えーと」

「……………ふえ」

目の前で突然銀髪眼帯少女が泣き出したからである。
いや決して僕が泣かせた訳ではない。
簡単に流れを説明すると、

レストラン探しに路地裏に入る

目の前の少女が暴漢に襲われかけているのを目撃

ヴィーグルを使い暴漢排除

少女に話し掛ける

少女泣き出す　イマココ！

…訳解らん。

まあ、何か僕の言葉が何かのトリガーになったみたいだし、取り敢えず事情を聞こうとしてみる。

「あの、大丈夫？」

「……大丈夫では……ない……」

お、日本語通じた。

「……また……他の隊員に馬鹿にされる……」

『隊員』って事は、何かの組織にでも入っているのだろうか。見た感じ小柄だけど『ひみつきちっこ』とかする年齢ではないっぽいし。

しばらく事情を聴いてみた所、何とこの少女、原作ヒロインのラウラ・ボーデヴィツヒさんらしい。まあ見たときからそんな予感はしてたけど。

…実はIS自体は3巻ぐらいまでしか読んでないんだよな、僕。何か有無を言わせずこの世界に飛ばされたし。

まあ、大体の事情は理解できた。

ちょうど今は、ラウラさんが目の改造を行ってスランプに陥った時と織斑 千冬から鍛えなおされる間らしい。

この様子を見る限り酷いイジメを受けているみたいだな…

なんか今の状況も街での隠密行動の訓練中他の隊員に嵌められてこうなったみたいだし。

さーて、どうしたもんかねえ…？

ま、どーせ助けるぐらいしか選択肢がないんだけど。

第一話 プロローグ（後書き）

初心者なので文も拙いですがよろしくお願いします。
更新はなるべく早めにする予定です。

…ヒロインとかチート能力とか全部AMIDAKUジで決めちゃったのは秘密。

第二話 僕が軍人になった流れとか（前書き）

急展開すぎた。

…すみませんorz

第二話 僕が軍人になった流れとか

~~~~~

あかい

あかい

まあいいけの

まんなかで

ぼくはわらう

ぼくはわらう

そうしたら



自分の身の上を言ったことで少し落ち着いたらしいラウラと僕は、その後表通りのカフェでケーキを食べていた。いつも街に出るときは訓練で来ることがほとんどで、あまり外で食べたことのないらしいラウラは周りをききよろししながらバームクーヘンを頬張っている。

…周囲を警戒しているのは解るけど、ぶっちゃけ小動物みたいでかわい。

「で、ラウラさん」

「ムゲ…何だ」

何か幸せそうな顔してる。けど、

「さっき言ってたことって簡単に話してよかったの？」

「あっ…」

やっぱり…

やっぱりこう言うのって、軍の方から拘束とかされるのかな……。早く終わるといいけど。

ま、その後当然僕はラウラさんの訓練の監視をしていたらしい人に取り押さえられ、ドイツ軍に身柄を拘束されてしまった訳で。

身体検査・尋問等々を3日間程やらされた。

ちよつと話をした監視の人に聞いてみると最初は「身元が特定できたらすぐ解放しますよー」とか言ってたのに、2日目辺りから「すいませんもう少し検査させて下さい、お願いですから！」みたいに態度が変わった。

…と言うか監視の人自体が軍服から軍服＋白衣の研究者っぽい人に替わってた気が。

で、それらが終わった直後、連れ出されていきなり軍服に着替えさせられた後いきなりさっきの様な事を言われた、と言う訳だ。





「身体能力・思考能力は遺伝子強化兵並み、しかも体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成されており、更に男性なのにIS適正Aなんてイレギュラーの何処が『一般人』なんですか。そんなこと言う口は塞ぎますよ?」

もうやだこの変態。

しかし、そこまで調べてたのか、ドイツ軍。

多分『体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成』  
つてのは『ヴェーグル』の副作用だろう。身体能力うんぬんも多分  
チート関連。しかし、

「IS適正A?」

そう、これは初耳なのだ。

女性にしか扱えないISは、男性には「IS適正：（なし）」を  
出すはずである。

そんな質問をする僕に、

「私達だって解らないんですよ！こっちの方が理由を聞きたいぐらいです！」

いやそんなキレられても困ります。

しかし、どうやら僕がISを動かせるのは（少なくとも検査上では）本当らしく、本当に動かせるなら僕をIS部隊に引き込み、駄目でも特殊部隊あたりに配属させる気らしい。というか、

「あ、御刻さんの日本国籍、消しときましたから」

…逃げ場が無くなりました。

要はあれだろう、『ドイツ軍に入らないと国籍無くなるよ?』といいたいんだろう。さっきの言葉の 所に書いてあった。

まあどっちにしろ、入るしか無いんだろうな……………

「はいはい、入ればいいんでしょう入れば。ちなみに僕の役職は？」

「あ、役職ではないですがあなたと一緒にいたラウラ・ボーデウィッヒさんとタッグを組むことは決まりましたよ」

まあ、それは予想していた。

片や『落ちこぼれ』、もう片方は『いきなり飛び込んできたイレギュラー（しかも男性）』である。

タッグにして隔離するのは考え方としては順当だろう。

「と、いう訳で、改めまして『シユヴァルツェ・ハーゼ』ようこそ、御刻 礼衣さん」

|| || || || || || || ||

その日の午後。

僕は本当にISを動かせるかどうかを試すため、ISの倉庫に来ていた。

「えーと」

多くのドイツ軍関係者が見守る中、黒いIS（量産型らしい。名前  
忘れた）に触れる。

触れた途端流れ出てきたモノは、

あか

[illegible]





めのまえの朱がまあるくオチテそこからみどりの根がトンデ青がのぼった

……そうか、ぼくはけっきょく

\*\*\*\*\*なんだ。

|| || || || || || || || || || side shift : ラウラ

「グ…え…アう…」

ISに触れ、装着された途端、いきなりミトキが苦しみ出したのを見て、それを見ていた人々は騒ぎ始めた。

しかし、騒ぐだけで誰も近寄る人はいない。

ミトキから発せられる雰囲気、あまりにも異常狂気じみていただったからだ。

眼の焦点は全くあつておらず、息も荒い。

そして、何よりも小声で発せられている言葉があまりにも狂っていた。

不意に、そんなミトキの姿が自分に重なった。

周りからは奇異の目で見られ、誰も近寄ることのない、その姿が。

そうか、この人も『ヒトリ』なんだな、と。

そう、思ってしまった。

なら、助けてあげなければ。



どうせ、周りの皆は助けようとはしない。私にそうした様に。

だから、これは偽善。

自分が彼を助けたら彼も自分のことを助けてくれるかもしれないという、そんな思考の結果。

そう自分に言い聞かせ、私は一歩を踏み出した。

break shift

壊れかけた自分の思考を引き戻したのは、小さな温かさだった。

その原因を探そうと目線を下にと送ると、僕のことを抱きしめてくれる小さなラウラさんの姿。

抱きしめ方は、まるで壊れ物を扱うように。

不意に、自分がラウラさんを助けた時のことを思い出した。

4人ぐらいの暴漢に立ちむかおうとしていたその姿は、どこか諦めたような眼をしていた。

『どうせ助けは来ない』と。

結局、僕がラウラさんを助けたのは、ただの自己満足とか同情みたいなものだったのかもしれない。

でも、今度は僕がラウラさんに助けられた。

こんな狂ったような僕を。

そのとき、僕はこの世界で初めて、心から温かいという感覚を実感できた。

## 第二話 僕が軍人になった流れとか（後書き）

感想・意見等お待ちします。

### 第三話 入隊初日（前書き）

今更になって一話の前書きに誤字を見つけるという致命的なミス  
r z

相変わらず微妙な文章です。

### 第三話 入隊初日

~~~~~

「なあ

ん？」

「来週授業参観だよな」

「そうだね」

「面倒くせえよな、高校一年生にもなって何を親に見せるんだよ。
どうにかなんないかね」

「今回で最後になるよ」

「は？高校二年生でもやる筈だろ？」

「いいから、来週を楽しみに待てばいいと思うよ」

?????まだ何も終わっていない時の一幕

oooooooooooooooo

僕がISを暴走させかけた事件から、二週間経った。

事件後一応行った動作テストではISを動かせたはいいものの、ドイツとしても僕としてもあのような事を毎回起こされたのではたまったものではないので、もう一度一週間かけて身体中を検査させられ、精神鑑定等々も受けた。

しかし、結果は『全く異常なし』。

原因が解らないのではどうしようもないので、結果あの時に僕を救ってくれたラウラさんが僕の監視役兼バディとして就くことが確定しただけになったらしい。ちなみに僕はラウラさんの補佐兼バディ。

そんなこんなで、実は今日がシユヴァルツェ・ハーゼでの初仕事だったりもする。ついでに今日から軍の宿舎へ正式に住むことになった。日本からの荷物の移動は全部やってくれたみたいで、とても有難い。今日は訓練だけらしいので、『初仕事』といってもそこまで感慨があるわけではない。検査終わってからずっと自主トレしてたし。

……一度、暇だったのでヴィークル使って自衛トラップだらけの軍施設の屋上飛び回った時はかなり驚かれたな……あれやった後

ラウラは『あれが入隊したての元民間人の動きだと？じゃあ私はなんだ！』とか軽く落ち込んでたし。研究者の人たちも『あのセキユリティ網を突破しただと？それが私たちの限界だと言っか！』とか頭を抱えてた。

あ、ちなみに『現時点で世界唯一の男性IS操縦者の監視役』という大役を任されたラウラは、周囲からも一目置かれる、というか手を出しにくい状態になり、イジメはなくなっただけ。『次は実力でも他の奴らを見返してやる』って気合を入れていた。その様子がかわいかったので、つい撫でてしまったら赤面して殴ってきた。まあ避けただけ。

そんな日の朝、ラウラさんと僕が朝食を食べていると。

「なあ」

「何、ラウラさん？」

「その『さん』付けは止めてくれないか？一応、今日から正式に私とお前はタッグを組むわけだからな」

「そうするのは別に構わないけど、ならその『お前』呼ばわりもやめてくれないかな、ラウラ」

「ふむ、別に良いだろう。ミトキ」

「あー、名字で呼ぶのはなるべくならやめてほしいんだけど……」

こっちの世界での両親の事を思い出すから。あの人達が最後に向けてきた目線は、紛れもなく『バケモノ』を見る目だった。そんなものの、誰も思い出したいとは思わないだろう。

「解った、レイ」

そんな僕の心境を察してくれたのか、ラウラは特に文句も言わず了承してくれた。

あの事件があってから、すごく、といえる訳でもないがラウラの僕に対する態度は他の人に対するそれよりも柔らかくなっていた。僕としても気軽に話しかけられるのはラウラだけなので、かなり有り難かったりもする。

「そつえばさ、ラウラ」

「なんだ？」

「今日の訓練内容って何なの？」

「簡単な基礎体力訓練だけだ、多分な。」

ついでに僕の紹介もする、とのこと。

隊員は全員女性らしい。まあIS部隊なら当然だが

……ラウラも居るし、心が折れるような事もないだろう、たぶん。

|| || || || ||

ついに来たよ、シュヴァルツェ・ハーゼでの自己紹介タイムが。
今やっと原作主人公の気持ち解った気がしないでもない。

おかしいな、なんで女子が10人程目の前に居るだけなのにこんな
冷や汗が出るんだろう。

皆さん妙に目が怖いんですけど。『獲物を見る捕食者（性的な意味
d……ゲフンゲフン）』みたいな。

「えーと、今日からシュヴァルツェ・ハーゼに隊員が一人増えまし

た。彼は『世界唯一の男性IS操縦者』ですが、このことは機密事項に指定されてます。表向きの役職は『ラウラ・ボーデウィツヒ隊員の専属機体整備担当兼アドバイザー』となってますので、その辺りの詳しい事情等は後でファイルを渡すので良く読んでおいて下さい。……あ、ちなみに彼の詳細プロフィールが入っている当たりのファイルが一つだけ紛れ込んでm」

「何でそんな変なことするんですかクラリツサさん！？てかそのプロフィールに情報どこから持ってきたんですか！？後皆さん急に目つきを光らせないで！怖いからそれホントに怖いから！」

急に雰囲気を変え僕のプロフィールが書いていると思われる紙を取り出そうとするクラリツサさん（何と驚いたことにシュヴァルツェ・ハーゼの隊長らしい。性格に問題がありすぎる気がする）を全力で止める。

何かとっても先行きが不安なんだけど……

「冗談です」

本当か？それにしても目がマジだった気がするんだけど。

「では、御刻 礼衣さん。自己紹介をお願いします」

この雰囲気で自己紹介かい。余計やりにくくなったよ。
まあ仕方ないか。

「御刻 礼衣です。さつき『世界唯一の男性IS操縦者』とか凄そうな紹介をされましたが、偶然そんな特性が見つかっただけの一般人ですので、特にそこら辺は気にしないでいいですよ」

「一般人は普通軍施設の屋上を生身で飛び回れるのか……………」

……………うおいらウラ。僕を孤立させたいのかい？
ほら皆さん「はあ？」とか「そんな身体能力私たちでも持っていないわよ……………」とかドン引きしているし。

まあ、当然その後の訓練では僕の周りにラウラかクラリツサさん以外の人は居なかった訳で。

……………転校デビューならぬ軍隊デビュー、失敗した気がするなあ……………。

……………

そんな悲しい訓練終了後。

僕はクラリツサさんに呼び出しを受けていた。

「何の要件でしょうか」

一応敬語を使った方がいいらしいのでそうする。

「宿舎の部屋が決まったのと、明日研究所の方でまた検査があります」

え、まだ検査するの？もう調べられる所なんて無いと思うんだけど。

「専用機のための適性調査をするそうです。一日で終わるらしいのでそんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

ああ、そういうことか。

やっぱりデータ取りのためには専用機は不可欠だろうし、どうせなら軍の『切り札』にしたいんだろう。

「そういうことなのでちゃんと忘れないように来てください。後、これが部屋の番号と認証用の身分証です。部屋番号は覚えたらすぐに破棄して下さい。これで連絡事項は以上です」

要は自分で行け、と言うことなのだろう。

仕方なく宿舎の指定された部屋の前に行くと、そこには何故か先客が居た。

「あれ、ラウラ？」

「ああ、レイか……」

あれ、何か落ち込んでる。

「何でそんな調子悪そうなの？」

聞いてみると、

「とりあえずこれを見ろ……」
と、部屋の扉に貼られてた紙を見せてきた。

そこには、

『53号室 御刻 礼衣

ラウラ・ボーデウィツヒ

「コンやは おたのしみ でしょうね b y クラリ
ッサ」

クラリッサさあああああああああん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

第三話 入隊初日（後書き）

クラリッサさん変態淑女化。

感想・意見等々待ってます。

第四話 朝にありそうなこと（ねーよ）（前書き）

戦闘シーンまであと少し。

やっとヴァーケル使いまくれる。

あと8000アクセスと1500ユニーク突破しました。下手な文ですが読んで頂き、本当にありがとうございます。

第四話 朝にありそうなこと（ねーよ）

oooooooooooooooooooo

「本当に*るのかい？」

「うん、そのつもりだけど」

「『*られる前に*る』なんて愚鈍で理想的な方法、君はやらないと予想していたんだけどな」

「それだけ追い詰められてるってことさ。失望した？」

「まさか。むしろ興味をそそられるよ。これだから人間は面白い」

「君も『一応』人間でしょ？何いつてるんだか」

「何百回も『転生』してると、どうしようもなく暇になる物だよ。終いには僕みたいな『人外観察者』になるのがオチさ。」

『そんなものなのかな』

『そんなものさ、イレギュラー転生者なんて』

僕と彼と暇潰しの下らない遊戯の会話

~~~~~

|||||side shift:ラウラ

部屋の前に貼ってあった張り紙についてはレイと二人で見なかった事にして、もう遅いのでとっとと寝よう、という話になったのだが。

「ラウラ」

「何だ」

「なんで裸なの？僕の精神衛生上せめて前は隠して欲しいんだけど」

「だが断る」

何でレイの精神衛生に悪いのが理解できん。

「あー、もうどうでもいいや。おやすみ」

む、流石に『どうでもいい扱い』されるのは心外だぞ。

反論しようにももうレイは寝てしまったようなので、仕方無く私も寝ることにする。

- - - - -

布団の中で考えていたのだが、私はレイに対し少し思い違いをしていたのかもしれない。

というのも、ここ二週間で気がついたのだが、レイが私を見る視線は同類を見るような同情の目だけではなく、どこか『私にあつてレイのは喪われてしまったナニカ』を羨み、私のそれを守ろうとする決意みたいなものが見え隠れしていた。

その『ナニカ』の正体だが、私の知る限りではレイの事を遠ざけた両親に関してぐらいいしか思い浮かばない。しかし、私はそもそも両親がいないし、その事に関しては隠す必要もないのでレイには前に話してある。よって違う。

……………そういえば、私が試験管ベビーであると言ったとき、レイは蔑む事なんてせずに『ラウラさんはラウラさんだから特に気にしないよ』と言ってくれた。ちょっと嬉しかった気もす……げふんげふん。

まあ、その『ナニカ』の正体は全く解らないが、『レイの心の闇は私よりももっと深い』という事だけは感じ取れた。

その上で私に気を遣ってくれているのだから、レイには感謝してもいけない。

……私が、少しでもレイの心を癒せるのなら、してやらんとな。

|||||break shift

朝が来た。

『ヴィーグル』を使えば意識のオンオフは割と容易なため、起きた直後でも頭ははつきりしている。

「……あれ」

ふと隣のベッドを見ると、ラウラはもう居ない。

もう朝食を食べに行ってしまったのだろうか、と思い、自分も急いで準備しようと布団から起き上がると。

「なんでここにいるのさ!？」

「ふぁ……?」

僕の布団の中にラウラが居ました。

しかも寝る前と同じ格好、つまり全裸で。

自分の顔が赤面していくのが解るので、『ヴィーグル』に乗って急いで心拍数を調整。

急いで『足』と『手』を『動かし』、急いでベッドの上から降りたところで『身体』を『捻り』ラウラの方向へ向ける。

これで一安心だと思ったら、

「あ、れいだ〜」

ラウラが素早い動きで抱きついてきた。

何とかして抜け出そうとするが、全く身動きがとれない。

どうすればいいのか迷っていると、

ガチャ。

「礼衣さん、そろそろ検査ですので急いだ方が………あ」

あ。

「おつと失礼しました。それではごゆっくり」

ボタン。

「クラリツサさあああん！誤解ですってええええええええええ！」

|| || || || ||

「すまなかった」

朝食を食べに食堂へ歩く最中、やっと頭が起きたらしいラウラは謝ってきた。

「いや寝ぼけたただけだろうし別に気にしてないけどさ、なんで僕の布団に入ってたの？」

「それが解らんのだ」

「いや解らないってどういふことさ。まさか寝ぼけたと言わないよねっ。」

「レイが私を自分のベッドに連れ込んだのでは無ければ、寝ほけたぐらいしか可能性が無いのだが」

「マジですか」

まあいいけど。

「そういえば、レイも今日適正検査なんだろう？」

「うん、そうだけど・・・ってレイ『も』って事は、ラウラも検査するの？」

というかまだ専用機無かったのか。

「そのようだ、仮にもレイは私の専属機体整備担当と言うことになってるからな。専用機がないと怪しまれる」

ああ、そういうことか。

その後も他愛のない雑談を二人でしながら朝食を取り、施設内のIS専門研究所に一緒に行った。

..... なんかその様子を見た一部から「新入りの御刻 礼衣隊員

とラウラ・ボーデウィツヒ隊員が恋仲である」なんて噂が流れ始めたらしい。余り悪い気はしないけど……げふんげふん。

そんなこんなで検査会場。

僕もラウラも身体検査等々は終わっているのに、何を検査するのかと話を聞いたところ。

「あ、戦闘傾向のデータ取るからとりあえず二人でテスト専用機使って戦ってみて」

……はあ？



#### 第四話 朝にありそうなこと（ねーよ）（後書き）

戦闘まで行けなかった・・・orz

ウィークルの機能ってあんな感じで良かったんですけど？

感想等々お待ちしてます。

後、もしかしたら明日と23日は投稿できないかもしれませんが  
詳しくは活動報告にて。

## 第五話 模擬戦前（前書き）

戦闘入れなかったorz  
焦って書いてしまった。

## 第五話 模擬戦前

~~~~~

「ねえ」

「何だい？」

「君は何故いつもここにいるの？学校は？」

「転生する度何回も同じ内容の授業を受けるのは苦痛だと思わないかい？それなら外で暇を潰した方がよっぽど有意義だ」

「そんなものなのかな」

「そんなものだよ、ボクの人生なんて。君も転生すれば解と思うよ？」

「いや、遠慮しとくよ。何か大変そうだし」

「それは残念」

僕と彼とのいつかの会話

~~~~~

「では、模擬戦のルールを説明します」

ろくに文句も言えないまま、ラウラと模擬戦をする事になってしまった。まあデータを取っていないものといえはこれぐらいしかないので、仕方ないのだが。

「シールドエネルギーの初期値は両者共に600、武装は適当に詰め込め……格納領域に様々な種類のものが入っているので、自分で自由に」

「今絶対に『適当に詰め込んだ』って言いかけましたよねえ!？」

「気のせいです」

嘘だ。

「気のせいだろう」



ちなみに僕の『ヴィークル』の操縦席は、いつもは初代ガ ダムの  
コックピットみたいな感じである。しかし、ISに乗った時はア  
ツクスみたいな全天候リニアシートみたいな形状に変化する。どう  
やら『ヴィークル』側でISのシステム関連をうまくシームレス化  
しているらしく、ハイパーセンサー内で認識している範囲もちゃん  
と可視化してくれるみたいだ。

ほかにも、『武装一覧』を呼び出してそのまま武器をコールしたり、  
シールドエネルギーや各武器の残弾数、ISの損傷箇所・損傷レベ  
ル等も『ヴィークル』から簡単に確認できる。

悪くなった点と言えば、IS側の生体補助機能のせいで一部の体内  
物質の分泌量が全く調整できなくなってしまった事ぐらいだろう。

以上前の動作テストで確認したこと終わり。

『ヴィークル』の展開が終わり次第速攻で『条件反射』のパネルを  
開く。

生体時計と照らし合わせながら、ちょうど試合開始と同時になり次  
第『マシンガン』をコールして、右に移動しつつ『ラウラ』にオー  
トで照準を合わせ発砲できるようにプログラムする。

プログラミングが終了し、開始まであと15・1925秒となつた  
とき、ラウラの方から通信が来た。

「レイ」

さすがに返答しないのはまずいので『声』を発する。

「なに、ラウラ？」

開始まであと7秒。

「本気で行く」

あと4秒。

「奇遇だね、僕も同じことを思っていたよ」

2秒。

1。

「「それでは、始めよう（か）」「」

戦闘が、始まった

## 第五話 模擬戦前（後書き）

感想お待ちしてます。

追記

誤字見つけたorz  
修正しました。



## 第六話 模擬戦（前書き）

やっと戦闘入りました。  
かなりテンポ悪いです。

## 第六話 模擬戦

~~~~~

『平和は犠牲の上に成り立っている』という言葉は、皆さんも時々耳にする事があるだろう。

無論、日本人のほとんどは『平和』の側に生活している。

さて、その『平和』の中で生きている人の中で、見ず知らずの『犠牲』側の人間をいつも気にして生きている人はどれ程いるだろうか。

……恐らくは極少数しかいないだろう。自分の身の回りにそんな人間がいたら、まず偽善者だと思ってい。本来そんな事をしていたら、直ぐに精神が狂ってしまう。

その点で彼は非常に不幸だ。なにせ嫌が応にもその存在を知覚しなければいけない所に、自分の平和の下にいる『犠牲』がいたのだから。

……さて、彼はどんな選択をするのか。自分の立場上干渉しにくいのがもどかしいが、これから非常に楽しくなるだろう。

ある人物の日記から

~~~~~

戦闘開始と同時に、さつき組んだ『条件反射』<sup>プログラム</sup>が作動。大きく右に移動しながら、ラウラに向けマシンガンを乱射。だが流石に向こうも訓練を受けた軍人である。一瞬こちらの攻撃の早さに驚いたようだが、直ぐに持ち直し被弾を最小限に抑える。そして直ぐにマシンガンで応戦。

少し被弾しながらも回避したのだが、ここで大きな問題が発生した。

「（思考加速も使えないのか、まずいな……………）」

『ヴィークル』の機能である、思考の高速化が出来ないのだ。多分ISの生体補助機能辺りと干渉したのか、全く稼働しない。当然それがないでも動く事はできるのだが、さらに悪いことにISと『ヴィークル』の間に僅かな反応の遅延があるせいで、動作のコントロールが難しい。

そのせいで回避した後も更に被弾してしまい、シールドエネルギーがじわじわ削れていく。

仕方ないので『ヴィークル』でラウラの武器の向きから弾道を予測、可視化してそれを頼りに回避、攻撃を繰り返す。

しかし、それでもすべて避けきれない。

何か策はないかと『武装一覧』を呼び出すと、一つの案が思い浮かんだ。

直ぐに右手にスナイパーライフル、左手にブレードをコール。

「レイ、ふざけているのか？」

「こうでもしないと勝てないと思って、ね  
！」

「なっ！？」

ブレードを前方に突きだしながら加速。

流石にこんな単純な攻撃をすると思っていなかったのが、ラウラは焦ってブレードを呼び出し応戦しようとする。しかし、

「甘いよ」

ラウラがブレードを構えるのを確認し次第、僕は右手のスナイパーライフルを構え、ラウラに<sup>目標</sup>発砲。  
ラウラのシールドを削っていく。

「不意打ちとは、やってくれるな……………」

そう言ったラウラが構えたのは、大型の荷電粒子砲。おいこっちに

はそんなの入ってなかったぞ。

とは言えあれに当たるのは不味いので、射線予測で急いで回避。

しかし、その先にいたのは。

「ラウラ!？」

「さっきの甘いという言葉、そのまま返させてもらっ

いつの間にか移動し、ブレードを構えたラウラだった。急いで回避しようにも、ISの反応が遅いせいで移動できない。仕方ないので左手のブレードで受け止めるが、押しきられそうになる。

急いで右手のスナイパーライフルを構え、照準を適当に合わせ発射。当てることはできなかったが、体を離すことには成功したので、急いで体勢を整える。

「よくかわしたな、レイ。それが本当につい最近まで民間人だった奴の動きか？」

「誉めてくれてるのかな、それは」

「そうだが？」

「それは嬉しいな、だけど」

「容赦はしない」

二人の言葉が重なると同時に、僕はラウラに向かって突っ込み

「あ、データ採れたんでもういいですよ」

ガタン。

「はあ……………」

研究者の介入によってISが停止したせいで、唐突に試合は終わってしまった。

|||||

そんな戦闘終了後、まず二人でやった事は研究者をぶっ飛ばす事だった。

そいつは「すいませんほんの出来心だったんですゆるしてくださいsギイアアアア」何て断末魔をあげていたが、そんなもの僕らの知ったことではない。真剣な戦いを邪魔した罪は重いのだ。

その後、ほかの研究者に個人的な要望（反応の遅さとか思考加速の事とか）を伝え、ラウラと一緒に宿舎に帰ることにした。

「ラウラ」

「何だ」

「さっきの勝負、いつか決着つけよう」

「そうだな、私もあんな結末では納得できん」

そう言って笑うラウラ。かわいい。

なでなで。

「ふにやつー!? ..... な、撫でるなあ!」

「あはは」

顔を真っ赤にして殴って来たので、僕はラウラに捕まらない程度にゆっくり逃げることにした。

..... 一方、その様子を見た他の人たちは。

「なにこの甘い雰囲気」と思ったそうな。

||||| side shift: ドイツ軍研究者のみなさん

「あの男性操縦者の方からISの反応が遅いと苦情が来た」

「何？あの実験機は専用機並みに反応が速いはずだが」

「ならどうすればいいんですか！？」

「仕方ないが、『アレ』を使っしかないか……（使いたいだけ）」

「『アレ』をやるとか、本気ですか？」

「なるべくなら避けたかったが、まあ仕方ない……（ほんとはすげーヤル気）。VTシステムは開発放棄だ。あんなものをダラダラ作り続けるよりも、急いで『アレ』を完成させるぞ！」

「……………了解です！！！！」「……………」

彼らがVTシステムの開発を全力でスルーしてまで開発しようとしたもの、それは

AMS（Allegory Manipulation System）である。



## 第六話 模擬戦（後書き）

弟から「ACFAネタ入れようぜ」という毒電波を受信したのでAMS搭載フラグを建てました。でもこれ以上ACFAネタを入れすぎるのはやめます。多分しつこくなるので。

ついでにVTシステムがどうか逝ってしまった気がするけど気にしません。

…… ヴィークルとAMSってかなり相性がいい気がする。

追記：一応用語解説（[ravenwood.jp](http://ravenwood.jp)様より転載、一部改変）

Allegory Manipulate System 【略称】  
：AMS

脳と機械の制御装置を接続し、操作を思考によって行うという次世代型アーマード・コア（ネクスト）の制御方式。

機械と行う電気信号でのやり取りを正確に処理できなければならず、使いこなすには先天的な才能（AMS適正）を必要とする。

接続者の適性が低い場合は非常に大きな負荷がかかり、脳や神経を損傷する可能性がある。元々は身体的欠損を補うための医療技術として研究されていたが、このために民生化できなかった。

その操作速度、精密性から次世代型アーマード・コア（ネクスト）の操縦方式として採用される。

この方式でない場合、ネクストの操縦には完全に連携できる数十人のチームが必要になるらしい。

稼働部分を簡略化したりすることで負荷は低くなるようである。逆に精密すぎたり稼働部位が多い装置ほど高いAMS適正を要求されるらしい。

ちなみに本作では、「AMS適正自体は必要ないが、AMS関連のシステムを構築するときには個人にあわせ一つ一つ作る必要がある」という設定にします。

閑話『彼と僕の出会いと、彼の興味対象が僕になったワケ』（前書き）

今日は部活で山に登ってるのでテストもかねて予約投稿。

今回はいつも本編の上に書いてるアレの少し長めバージョンです。

閑話『彼と僕の出会いと、彼の興味対象が僕になったワケ』

|||||shift: dream

これは、僕がまだ狂う前のおはなし。

彼と初めて出会ったのは、高校の入学式があった帰り道、公園での事だった。

その頃の僕は『あの事』を理解してしまったせいでかなりショックを受けていた。

ただでさえ荒んだ視界の中、公園の彼に気がついたのは、全くの偶然だろう。

なにせ彼はただでさえ目立つ筈の銀髪で、更に公園の広場のど真ん中に立っていたにも関わらず、全くと言っていいほど存在感が無かったのだから。

そんな彼にぎょっとして立ち尽くしていると、彼がこちらに気が付いたのか、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

一瞬逃げようとも思ったが、別に逃げる必要性を感じなかったのもそのまま立ち止まる事にした。

彼は僕の目の前に立つと、

「いやはや、まさか気付かれるとはね」

と言いながら笑った。

「上手く気配を消したと思ったのだけれど」

「なぜ気配を消そうとしたの？」

「なに、ほんの酔狂さ。そうした方が僕の趣味がやり易いからね」

「趣味って？」

「世界の観察。長く生きていると、そのぐらいいしか楽しく思える趣味が無くなるものでね。まあもつとも、これもあまり楽しいとは思えないけど」

「『長く生きてる』と言うには、君は若すぎると思っけど？典型的な中二病かい？」

「中二病とは失礼な。僕は転生者なんだよ」

「はいはい中二病乙」

……そうは言ったものの、その後の話を聞いているとそうは思えなくなってきた。

空想の出来事にしては、あまりにも内容が細かすぎる。  
結局、

「解った、信じるよ」

と言わざるを得なくなるまでに。

僕が彼に降参した後、彼は

「さて、君の話を聞かせてくれないかい？」

と話を振ってきた。曰く、

「他人の話は、僕にとって最高の暇つぶしだからね」

らしい。

一瞬話そうか迷ったが、さっきの彼の話が本当なら彼に逆らっても

どうしようもないので、僕の話することにする。

|| || || || || ||

僕の話聞いた後、彼は

「興味深いね、君の人生は」

と一言だけ感想（？）を言った。

「久々に面白い事を聞いたよ。ありがとう」

「僕の人生はそんな扱いか……」

まあいいけど。

「明日もここに来てくれないかい？その話の続きを見たい」

「えー……」

流石にそれは嫌だ。こっちの精神が持たない。

「僕なら君を救えると思うけど?。」

「なんでそんなことを?。」

「なに、暇つぶしさ」

そんな事を彼は言ったが、こちらとしてはなんでもいいからすがり  
たい気持ちではある。

本当に彼が転生者なら、人生経験も豊富だろう。

「なら解った、明日もここに来るよ」

それが、彼と僕の始まりだった?????????

|||||dreamend

「起きろ、レイ」

「ああ、ごめん少し寝てた」

少しうたた寝していたら、心配そうな顔をしたラウラに起こされる。

「どうした?寝ながら泣いていたぞ?。」



多分『まだ普通だった頃』の夢を見たからだろうか、僕は寝ている間に泣いていたみたいだ。

……思えば、あの頃は確かに辛かったし、幸せだったと言い難いけど、まだ楽しかった。

そしてその日々さえも、もう戻らないのは解っている。

でも、

「ねえラウラ」

「何だ？」

「こんな壊れた僕でも、幸せに生きていけるのかな」

「当然だろう？ レイはレイだ。自分の幸せを見つけられる筈だ。…

…まあ、何処かの本の受け売りだが」

「ありがとう。それでもすごく嬉しいよ」

??????? 少しぐらいだったら、甘えてもいいよね。

閑話『彼と僕の出会いと、彼の興味対象が僕になったワケ』（後書き）

ちなみに作者はこれが投稿される頃に山頂にいます。

感想等お待ちしております。

## 第七話 越界の瞳とAMS

（ドイツ軍変態研究者の本気）（前書き）

投稿遅れたー！ー！orz

相変わらずの駄文ですが、皆さんからのアドバイスで少しはマシになってくるかなーと思っていたり。

本当にありがとうございます。

## 第七話 越界の瞳とAMS

（ドイツ軍変態研究者の本気）

~~~~~

彼の人生の話は僕の暇を潰すには十分だった。

いや、本当に興味深いのは彼自身かもしれない。

なにせ、彼は自分の下にある『犠牲』に気が付いた上、その『犠牲』に無理矢理にでも手をさしのべようとしているのにも関わらず、自己の精神を非常に危ないところではあるが安定させつつある。

.....その『犠牲』が本当に救いを求めているかなんて全く気にせず。

さて、彼がそのことに気がつき、心の安定が崩れたとき、彼はどんな行動をするかな？

非常に楽しみだ。

ある人物の日記より抜粋

「一夏、何をやっている？」

「おっと誰かと思ったたら姉さんか。驚いたよ」

「さつきから後ろにいたんだがな。で、何をしていた？」

「いや、ただの中二病小説を書いていただけさ」

「おまえは何をやっているんだ……。まあいい、風呂が沸いたので先に入っているぞ」

「はいはい」

「ふう。危うくバレル所だったよ。まさか前世で見た面白いものについて色々と纏めてた」なんて言えないからね。さて、『彼』は今どんな様子かな……？」

~~~~~

中途半端に終わってしまった模擬戦から二週間後。

僕らには特に何事もなく、クラリツサさんにからかわれながらも二人で訓練を続けていた。

ラウラは頑張って訓練をしていたおかげで、部隊内の成績ランクでは一番下から上位3分の1に入るまでになっていた。

ちなみにラウラが僕の布団に入ってきたのは最初のあの日だけで、翌日からはちゃんと別の布団で寝ていた。あいかわらず全裸ではあったが。

……僕？相変わらず孤立してますよ？  
ちよつと訓練中張り切つて本気出したりすると毎回ドン引きされま  
すから。

そんな日が続いたの朝のこと。  
僕とラウラは、

「……………状況説明ぶりーず」

「面倒なのでイヤです」

起きたら何故かドイツ軍の研究部門に拘束されていた。

「いやいや明らかにおかしいでしょこれ。何で僕もラウラも何か手  
術台みたいなのに縛られて乗っけられてるんですか？」

「面倒なので以下略」

未だ寝ているラウラが羨ましい。一体どんな状況か誰か説明してく  
れよ……………

「リーダーである私が説明しよう！」

「何か変なのキターー！」

いきなり白いマントとサングラス掛けて格好つけてる良く解らない  
女性（多分研究グループのリーダーらしい）が現れた。何で貴女そ

んなノリノリで登場したのとか何時からスタンバイしていたとかいろいろと聞く事はあるが、今の所説明してくれそうなのは彼女一人なので黙って話を聞くことにする。

……………他の研究者の方々が『ああまたか』みたいなすっぱー疲れきった顔してる。お疲れ様です。

「突然だが、君達には手術を受けてもらおう！」

「本当に突然ですね」

というかテンションが高過ぎです、ラウラが起きるでしょうが。

「このテンションが素だ、よって下げる気もない！しかもボーデヴィツヒには事前に事情説明をした上で麻酔で眠らせてあるだけだ！」

「ならいいです」

なんか心読まれた事には突っ込まない。話が進まないし。

「さて肝心の魔改z……………手術の事だが」

「今絶対に魔改造って言いかけましたよね」

まあいいけど。

「まあ簡潔に言っと、君達の専用機のために必要なんだ」

「へー」

搭乗者に手術が必要なISってどんなだよ。

「君は模擬戦の時、『反応が遅い』といったらしいな」

「ええ」

確かに言いましたけど。

「そこで私は考えた、『皮膚通しての通信が遅いなら、脳に配線組んで直接やりとりさせれば良くな？』と！」

「わあいとてもマッドな考え」

てかそれ何かAC4系のAMSに似てないか？この世界にもACシリーズ自体はあったし。

「ちなみに参考にした、というかぶっちゃけ丸パクリしたのはクリッサから借りたこのゲームだ。まあ私にはゲームスピード（機体速度的な意味で）が速すぎて全然進められていないがな！」

「もしかしてゲーム下手？」

「うるさい黙れ気にしてるんだ私も！」

似てるとかそういうレベルじゃなくて、まんまACFAでした。と  
淑女  
いうか元凶は、相変わらず変態加減がメーター振り切ってるあの人が。あんた何処へ行く気だよ。



「まあそういう訳で、君たちに処置を施す」

「別にいいですけど、具体的にはどんなことを？あと僕が了承した瞬間目がギラギラさんの怖いのでやめて下さいホントマジ怖いんでお願いですから！」

まっどさいえんていすとして怖いね。

「チツ仕方ない……」ヴォーダン・オージェ内容としてはAMS用の脳内回線を作るだけだ。あ、ついでに『越界の瞳』も付けるか？ボーデヴィツヒの瞳をメンテするついでだ」

「どうせ断つても『手が勝手に動いた』とか言ってやるつもりですよ……」

「当たり前だ」

いやそんな『キリッ』とかされても。

「と言うかメンテなんてできるんですか？」

「脳内回線を配線するときに、以前のタイプの『越界の瞳』ヴォーダン・オージェだと一部邪魔になる箇所があるからな。」

いいのかそれ。もう一回『越界の瞳』ヴォーダン・オージェを搭載し直すんでしょ？

「理論上は可能だからいいんだ。瞳の色は治せない上に、『越界の瞳』ヴォーダン・オージェが本来持つている機能を最大限使うこともできないが、少なくとも制御不能状態からは抜けられるだろう。ただし本当にそうなる

かは一切保証できないがな！」

「だめじゃん」

本当にこんな人にリーダー任せて大丈夫か？  
ドイツ軍よく雇ったな。

「まあいい、とつと始めるぞ。」

「いやちよつとまつて「問答無用だ」はい……」

結局無理矢理押し切られる形で麻酔をかけられ、僕は眠りに落ちた。

|||||

手術が終わり、僕はベッドの上で目覚めた。

話を聞く限り、二人とも手術は成功。

ラウラの『越界の瞳』<sup>ヴォーダン・オージェ</sup>も、一応機能回復はしたそうだ。

そして僕とラウラの首筋には、AMS接続用の端子が埋め込まれた。

手術前にも少し疑問に感じていたので、なんでラウラにもAMS端子を付けたの、とあの人に聞いてみると、

「手が勝手に動いた」

とドヤ顔をしゃがったので、とりあえず投げ飛ばすことにした。

まあ頭を色々いじられたのかもしれないけれど、僕もラウラも無事なので、まあいいかなと妥協することにする。

……専用機、楽しみだなあ。  
ラウラともちゃんと戦いたいし。

## 第七話 越界の瞳とAMS

（ドイツ軍変態研究者の本気）（後書き）

ご意見・ご感想お待ちします。

そして『彼』の原作介入フラグが立った気がしないでもない。

## 第八話 ある日の訓練風景・そのいち（前書き）

お気に入り件数130件突破、累計PV40000超え&累計ユニーク8000超えですって。

……皆さん本当にありがとうございますm（ ）（ ）m

## 第八話 ある日の訓練風景・そのいち

~~~~~

『誰だ』

「もしもし、『僕』ですよ」

『ッ！貴様か、我がドイツ軍を

』

「僕に対して何て口の聞き方なんだい。一応、僕の方が立場が上なんだけどな？」

『クッ……。それで、今回はどんな^{窮迫}ご用件で？』

「何、そんな大した事じゃないさ。君達、礼衣に強化手術、確かAMSと何とかの瞳だっけ？やったんでしょ」

『行いましたが、それが何でしょう？』

「まさか、『それ以外』の事もやってないよね？」

『ッ！……………はい。やっておりますん』

「ま、ここで嘘ついてもすぐ解るんだけどね。一応釘を刺しとこう
と思つて。観察対象折角預けてやっているんだ。僕の大親友を
下手に傷つけるような事があつたら、許サナイデスヨ？」

『ヒツ、り、了解しました！』

「それじゃあ、またいつか。

全く、道化も楽じゃないよ。まあ、観察対象親友の安全を守れ
るなら、それでいいけど」

oooooooooooooooooooo

僕とラウラは、手術後の療養期間も終わったので、また訓練に復帰
していた。

A M Sはまだ使う機会が無いので使っていないが、越界の瞳の調子は上々である。

……………というか裸眼で一キロ先見えるとか、やっぱり凄い。

そして専用機については、あのよくわからん研究者が

「よっしゃ後は最終調整だけだぜえええええええええええい！」

と施設の屋上から叫んでいるのを前に見かけたので、多分もう少しなんだろう。というか今更だけどあの人頭大丈夫か？

さて、そんなことはさておき、今日も訓練の日である。

今回の内容は余り乗り気でないのだが、来てしまった物は仕方ない。その内容とは、

???????? 『格闘戦』である。

|||||||

「今回のメインはトーナメント制にして、残りの待機中の隊員達は試合中の人たちを見て学習することにしましょう」

訓練を始める前、クラリツサさんがそう言った。

まあ確かに、訓練方法としては妥当だろう。割と皆さん熟練の人たちだし、練習のしすぎで下手にけがをするよりも、集団行動の時に活かせるよう他の隊員の動きを見てクセを把握しておいたほうがいいだろうし。

まあそんなこんなでトーナメント表が表示されたのだが、

「なんで僕だけ孤立してるんですか」

何と僕は決勝戦まで出番が無かった。

「多分礼衣さんとまともな勝負ができるのはこの隊でも極少数でしょうし、なにより実戦でもないのに男性と戦うのはちょっと……みたいな人が多いので」

「なら仕方ないですね」

確かに、ISが登場した今もIS無しだったら男性が強いし、同じ隊とは言えとても親しい訳でもない男性に体を触られるのは嫌だろう。

そんな訳で、僕は出番が来るまで試合観戦をすることにする。

……………ラウラ以外誰も話掛けてくれなかったのが、地味に悲しい。

|||||

「やっと出番が来たぜヒャッハウ！」

「何かテンションがおかしくなっていないか？」

おっとこれは失礼。

ラウラに指摘されたので、テンションを修正。対戦フィールドへ向かう。

ちなみにラウラは準決勝でクラリッサさんに負けた。まあ身長差利用されて攻撃されてたから仕方ないね。

ということで、僕の対戦相手はクラリッサさんである。

対戦ルールは簡単。『相手の背中を地面につけられたら勝ち』だ。

「では、両者準備して下さい」

そんな合図と共にフィールドとなっている草むらに二人で向かい合って立ち、開始のブザーが鳴るのを待つ。

その間に『ヴィーグル』を起動し、『条件反射』でブザーが鳴った瞬間に踏み込んで一撃を加えられるようにプログラム。

「礼衣さん」

「何でしょう？」

「あの……（男性との戦いは）初めてなので、優しくして下さいね？」

そこでその台詞を言うか。括弧内なかったら意味が凄く変わってくるんだけど。

多少心拍数が上がったので、急いで修正。

丁度ブザーが鳴ってくれたので、僕はクラリッサさんに向かって突っ込むことにした。

第八話 ある日の訓練風景・そのいち（後書き）

相変わらず短えorz

ご意見・ご感想お待ちしております。

あと土日の少なくとも片方は更新できないかもです。

第九話 専用機（前書き）

昨日は投稿できずすみませんでしたorz
その代わり今日は文章量多めです。いろんな意味で。

第九話 専用機

~~~~~

ずずず。

「ふう……………」

ずぞぞぞぞ。

「はふ……………今日は平和だ。茶がうまい」

~~~~~

ある日の朝、訓練に行こうと部屋のドアを開けると。

「待たせたな！」

「……………」

ボタン。

「どうしたレイ、遅れるぞ?」

「いや、ちょっとね……………」

言えない。『ドアを開けたら目の前にサングラスとマントを羽織った変態がいた』なんて、幻覚のはずだ……。

「？……………まあいい、行くぞ」

ラウラが不思議そうな顔をしながら、ドアを開ける。

ガチャ。

「やらないか」

「……………」

ボタン。

どうやらラウラにもアレが見えたらしい。無言ながらも全力で目線を逸らしながら扉を閉めていた。

「なあ」

「何？」

「今見たものを全力でスルーしたいのだが、何かいい案はないか？」

「正直僕もそうしたいけど、案がない」

「ならこの私が提案してやろうか？」

おおそれは助か……………って。

「どっから入ってきたんですか貴女」

気がついたら知らないうちに部屋に侵入されてた。

「勘だ」

まっどさいえんていすとして凄いな。

「後私の名前をいい加減覚えてくれ、寂しくて泣くぞ?」

絶対嘘でしょ。まあいいけど。

「解りましたよ……………ヘルマさん」

「よろしい」

僕とラウラの目の前にいるサングラスの変態、ぶっちゃけ前に僕らを手術したこの女性の名前は『ヘルマ・ハルフォーフ』。早い話がクラリッサ変態……………隊長の母親である。

ただでさえ『変態』のクラリッサさん相手に話していても疲れるのに、その母親である『変態の中の変態』ヘルマさん相手だと最悪こちらが死ぬ。主に精神的に。

そのため、あまり長く話したくはないのだが。

丁度よく、ラウラが用件を聞く。

「で、ヘルマ。用件は何だ。まさか暇潰しではあるまい?」

「そのまさかだ」

えー。

「嘘だ」

「なあ、こいつ殴っていいか？ いいよな？」

ラウラが額に青筋を浮かべる。

まあさすがに殴るのはまずい、というかこのままだと話が進まない
ので、用件を聞き直す。

「まあまあラウラ落ち着いて。で、本当の用件は何ですか？」

「仕方ない本題に戻るか。簡単に言うとだな……」

お前らの専用機ができた」

「「おおー」「」

何かこの事実を聞くのにとっても時間が掛かった気がしないでもない。

＝
＝
＝
＝
＝
＝

「よし、フォーマットとフィッティングは完了したな」

あの後僕とラウラはヘルマさんに連れられ、渡されたISを装着した。

ちなみに僕が渡されたのは『シュヴァルツェア・ヴォルフ』という名前の機体。

全体のカラリングとしては黒地に青のラインが走っており、背部には中心の大きなスラスタと4つのウイングスラスタ、非固定浮遊部位には羽っぱい形の実弾シールドが付いている。体を委ねるところには当然AMS端子。

主武器は大型プラズマ手刀『ゲファールン』と遠く近全距離対応双発型プラズマライフル『ナフトフォーゲル』、そして16本のワイヤーブレード、ついでにAIC。

何でワイヤーブレードがこんなに多いのかヘルマさんに聞いてみたところ、

『大丈夫だ、お前にAMS接続したらやれるっぽいぞ』

『ぽい』ってなんだ『ぽい』って。

あと、『思考加速』が出来るようにと、生体補助機能も切ったらしい。

……アレって確かISのシステムの根幹辺りにあるんじゃないかなかったっけ、どうやったんだろ？

まあいいんだけど。あの人なら何やってもおかしくないし。

ラウラの機体は原作通り『シュヴァルツェア・レーゲン』だが、ワイヤーブレードが上記と同様の理由で10本に増え、プラズマ手刀が大型の『ブルーム』になっている他、レールガンがレールガトリングガン『5・8・1』になっている。エネルギー効率の方は一応大丈夫らしいが、ガトリングガンの制御にはAMSが無いときつ

いらしい。

以上簡単な機体説明終了。

今回はフィッティングついでにラウラとの再戦もやるつもりだ。

ヘルマさんも、

「お前ら戦うんだろ？適当にやってみろ。私としても機体の出来を見たい」

と言ってくれたので、今回は最後までやれるっぽい。

やったねたえと「おいやめろ」また思考読まれた……だと……？

|| || || || || ||

二人でIS訓練用の戦闘アリーナ上に静止。

待機中、『条件反射』のプログラムついでにラウラに話掛けることにする。

『ねえラウラ』

『何だ』

『機体の調子どう？』

『上々だ。そちらこそ大丈夫か？』

『こっちも万全だよ』

『そういえば、何で個人間秘匿通信で通話している？』

『試してみたかっただけ』

『……そうか』

ため息つかれた。まあ仕方ないか、僕もやりたかったただだし。

「そろそろ始めるぞ。30秒前」

ヘルマさんの声でカウントダウンが始まる。

それと同時に『条件反射』の項目の最終調整を始める。試合開始と同時に『ナフトフォーゲル』をコール、一気に距離を離しながら遠距離モードで狙撃できるようにセット……完了。

試合開始まで残り10秒。

『じゃあ始める？』

『そうだな』

5 / 4 / 3 / 2 / 1 …… 0

「あのときの続きを」

試合、開始。

ラウラが『5・8・1・』を構えて撃ってくるが、初撃だけはあつ

たたものの急いで後ろに下がることで残りは回避。

十分距離を取ったら『ナフトフォーゲル』を遠距離モードにセットし、狙撃?????ヒット。

追撃はせずに、大きく左へ移動。

ラウラが『5・8・1』で応戦してきたが、これなら回避できると予想。

しかし、

「予想以上に弾速が速いね……」

「ああ、私も驚いた」

いくらガトリングガンとはいえ、レールガンである。

普通のカトリングガンとは比べものにならないほど弾速が早い上、一撃の威力も高く、射程も長い。

仕方ないので『ナフトフォーゲル』を連射モードにしながら発射、ラウラに急速接近

『5・8・1』での攻撃を受けるが、思考加速で体感時間を延長、回避できるだけ回避し、残りはシールドで防御。

すれ違いざまにワイヤーブレードで攻撃を仕掛けた後、一気に離脱する。

ラウラも負けじとスラストの出力を上げ、一気に接近してきた。急いでワイヤーブレードを4つほど出し攻撃を加えようとするが、ラウラもワイヤーブレードで応戦。全て防がれる。

「その程度か?レイ」

「んー、じゃあこれならどう？」

ワイヤーブレードを16本全て射出。そのうち6本をラウラの後ろに回り込ませる。

ラウラも応戦しようとするが、ワイヤーブレードの本数が足りないため、一部を『ブルーム』で応戦。するが、対応しきれずだんだんと僕の方に近づいてくる。

ラウラの距離が十分近づいた瞬間、A I Cを発動。ラウラの動きを縛る。

「なっ…聞いていたがこれほどまでとは……」

「やっぱり全然動けない？」

「ああ」

やっぱりつよいねA I C。

とはいえラウラの動きを縛ることが出来たので、このまま『ナフトフォーゲル』を近距離モードにセット、発砲。

ラウラのシールドエネルギーを5分の4程削り、このまま勝てるかなーとか思ったその瞬間、

「あれ、動けない」

「当たり前だ、私が掛けたのだからな」

ラウラにA I Cを掛けられた。

そして僕が一瞬集中を切らした瞬間、ラウラは『5・8・1』を構え発砲。

こちらのシールドエネルギーを大きく削っていく。

何とかしてワイヤーブレードを射出、攻撃し、シールドエネルギーが0になる前にAICから抜けられた。

埒があかないので『ゲファールン』をコール、そのままラウラの懐へ突っ込む。

「くっ!？」

「これで、決める?????!」

ラウラが急いで『ブルーム』を展開したのが見えた瞬間、

世界が、白く変わった??????????

|||||worldshift

「……………あれ？」

「ここは何処だ？」

戦闘中だったはずの僕とラウラは、何故かよくわからない白い空間にいた。

しかし、全てが白い訳ではなく、所々に本が散らばっている。

「この本は何だ？」

「何だろうね？見当が付かない」

まあ立ち止まってもどうしようもないので、二人で本を取ってみると。

「これ、ラウラの名前が書いてある」

「これはレイの名前が書いてあるな」

二人で互いのぱらぱら捲ってみると、その中にはそれぞれの相手が過ごした今までの人生が書かれていた。

ラウラの人生は、実験施設で生まれて兵士としての教育しか受けなかった人生。

僕の人生は、学校で人を*し、その後この世界に来た人生。

「ねえラウラ」

「何だ」

「ここに書いてあることは本当？」

「そうだが、それはレイもなのか？」

「?????うん、そうだけど」

|||||side shift:ラウラ

レイの人生は酷い物だった。

守ろうとした物を守れず、最終手段として殺しを働いた。

そして死ぬ間際、守ろうとした物に裏切られ、絶望の中殺されこの世界に流されて来た。

今まで誰も気がついてやれなかったレイのそんな暗い感情。

もしかしたら、私は少しおかしいのかもしれない。

だって、レイの心のどす黒い闇を見てしまったにも関わらず彼を受け入れようと思えるほどに、彼を好きになっていたのだから。

始まりは助けて貰ったときから。

そして私の生い立ちの事を話したときも、レイは特に何も言わず受け入れた。

私の訓練中にさりげなくサポートしてくれたのもレイである。

だから、レイが

「どう思った？僕の人生」

と言った時も、

「特に気にしないぞ？レイはレイだからな」

と答えられた。

彼の心を、少しでも軽くするために。

|||||break shift

「特に気にしないぞ？レイはレイだからな」

そう言われたとき、僕はとても驚いた。

てつきり、こんな屑みたいな人生を送ってきた僕を軽蔑するかと思
っていたからだ。

そんな一言で大げさななんて思うかもしれないけれど、僕としては
とても嬉しかった。

そして、好きになってしまった。

こんな僕を受け入れてくれたラウラを。

|||||inner psychological world:
end

試合終了を告げるブザーの音で、僕らは元の世界に戻った。

結果はラウラの勝ち。

ギリギリで『ブルーム』が当たる方が早かったらしい。

戦闘後はそのまま宿舎に帰り、その日は休むことにした。

「あーあ、負けた」

「私もギリギリだったけどな」

「それでも、負けは負けでしょ。あ、ラウラが勝ったんだし、何か一つぐらいだったらお願い聞くよ?」

「なんでもいいのか?まずそんな約束はしてないが」

「いや、僕の出来る範囲だったらいいかなー、なんて思っ」

「そうか、なら????????」

ラウラは僕に抱きつき、

「好きだ」

急に告白をしてきた。
だけど、

?????????????そう言われたら、受け入れるしか無いじゃないか。

第九話 専用機（後書き）

相変わらずの急展開&駄文クオリティ。
あまり成長しない作者をお許し下さい。
しかも次からかなり時間飛びそうです。具体的には中三のモンドグ
ロッソ辺りまで。

……モンドグロッソって夏開催でしたっけ？あれ？

感想お待ちしてます。

補足：礼衣とラウラが飛ばされた白い空間について

一応はISの特殊相互意識干渉により形成された世界と言う設定で
す。

「『相互意識干渉』なんだから二人の意識によって構成のされ方っ
て変わるんじゃない？」みたいに思ったのでこうしました。

第十話 再会（前書き）

安定の急展開。
そして短い。

第十話 再会

~~~~~

「姉さん」

『何だ』

「ごめん、急用が入って決勝見に行けないかも」

『学校の用事か?』

「うん、同好会の用事があって。次は絶対見るから、本当にごめん」

『解った。次は絶対に来いよ』

「うん、じゃあまたね」

という訳で、今年は決勝を見に行く羽目になった。  
やはり誘拐のイベントは不可避なのだろうか。

……何か対策を練らなければ。



とありがたいお言葉をいただいたので、お礼としてラウラと二人で空の向こうへかつ飛ばしてあげた。

……さて、なぜ僕がこんな現実逃避をしているかというと。

「やあやあ久しぶりじゃないか。15年とかそのぐらいかな？」

モンド・グロッソの会場へ電車で移動中、僕らの目の前に突如『彼』が現れたからである。

全く状況が読めない。というか前もこんな流れあった気がするぞおい。

ちなみにラウラは僕の肩に頭を預けながら寝ている。かわいい。

まあラウラの可愛さで現実逃避していてもどうしようもないので、仕方なく話し掛ける事にする。

「いきなり出てきて来ないでくれないかな、\*\*。驚くじゃないか、まさか君も転生してるなんて」

「その割には落ち着いている様に見えるのは僕の気のせいかい？ 後この世界での僕の名前は織斑一夏だから、前世の名前では呼ばないでほしい。紛らわしいからね」

これでも十分驚いているんつもりだけど。  
って、

「織斑一夏って、まさか」



「そのまさかさ、どうやら僕はこの世界の主人公らしい。全く、困った物だよ」

「君は人間観察が趣味なんだろう？むしろ主人公なんておいしい立ち位置、普通は喜ぶんじゃない？」

「その代わりに面倒が多すぎるんだよ、今回のことみたいにね」

ああ、そういえば『彼』は面倒事が嫌いなんだった。  
前世でも僕をさんざんパシってたし。

あー、嫌な予感しかない。『彼』がこんな雰囲気の時、絶対に何か僕に頼むつもりだ。

「どうせまた面倒事の解決を僕にさせるんでしょう？」

「当たり前。で、内容は

僕の護衛、ついでに誘拐犯の殲滅だ」

## 第十話 再会（後書き）

『彼』、介入。

あ、明日は人物&IS紹介のみ上げます。

J u b e a t でマチラン選択しまくる作業があるので。

……ダメ人間とか言わないでo r z

## 人物&IS設定V0・15（前書き）

人物&IS設定上げました。

多分これからも追記されます。

訳わかんなくなったときにでもどうぞ。

### 12/3 追記

あ、バージョン表記変わったら追記されてますので。

## 人物&IS設定V0・15

### 人物紹介

御刻 礼衣（ミトキ レイ）

性別：男

身長：173cmぐらい

転生者かつ主人公。チート能力は『ヴィークル』。

髪の色は濃い灰色、眼の色は茶色。

『シュヴァルツェ・ハーゼ』隊長補佐（名目上はラウラの専属機体整備担当兼アドバイザー）。

前世で通っていた学校で殺人事件を起こし、その後殺されてからISの世界に来た。

上記の事件の影響で精神的に不安定な面もあり、多少感情の流れが乏しい。

ラウラに自分の事を理解し、理解してもらってからはラウラと恋仲に。

『彼』とは前世からの友人。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

性別：女

身長：148cm

ヒロイン。チート能力は無し。

原作との相違点は、

・13〜14歳の時点で既に実力をつけ、『シュヴァルツェ・ハーゼ』の隊長に

・礼衣と恋仲

・越界の瞳の機能が一部回復等。

織斑 一夏（『彼』）

性別：男

身長：178cm

転生者。チート能力は有るのかどうかすら不明。

何百回と転生した影響で、暇を持て余し、人間観察を趣味とし始める。

前世で礼衣に興味を持ち始め、礼衣が転生したことで更に興味を持つことになる。

前世での事件の一因はコイツ。

それに多少は責任を感じているせいかは解らないが、転生後のこの世界では礼衣を裏でいろいろサポートしている。

ヘルマ・ハルフォーフ

性別：女

身長：165cm

変態。ついでに研究者。

クラリッサ・ハルフォーフの母親であることから解るように、かなりの変態である。

しかし裏では、ラウラが以前に比べ態度が柔らかくなった事を純粋に喜んだりするような一面も。でもやっぱり変態。と言うか裏設定なだけなのであんまり本編には関係しない。

礼衣たちの専用機を魔改造したのはコイツ。

## IS 紹介

## シュヴァルツエア・ヴォルフ

御刻 礼衣の専用機。他のシュヴァルツエアシリーズと同様に黒をベースとしたカラーリングになっており、所々に青いラインが走っている。

ウイングスラスターを多数搭載しており、これにより時速1500 km/hオーバーの超高速機動が（一応）可能。

非固定浮遊部位には羽の形を模した実弾シールドがついている。

操作方法にドイツ軍独自開発のAMSを使用しているため、御刻礼衣以外の人間が乗ろうとしてもAMS関連で拒絶反応が起きる。

さらに、御刻 礼衣の『ヴィークル』の能力と一部干渉したためにISの本来の機能である生体補助機能を撤廃。これとAMSの影響で、御刻 礼衣以外が乗ることはほぼ不可能に近い。

## オリ武装情報

遠く近全距離対応双発型プラズマライフル『ナフトフォーゲル』

モード切り替えにより、遠く近全距離へ対応できるようにしたプラズマライフル。

なぜ双発型なのかと言うと、ヘルマ・ハルフォーフが「そっちの方がかつこいいじゃん」と指示したため。

大型プラズマ手刀『ゲファールン』

プラズマ手刀の大型版。なぜ大きくなったかと言うと、ヘルマ・ハルフォーフが以下略。

## シュヴァルツエア・レーゲン

ラウラの専用機。

外観には大きな変更は無いが、主な操作方法がAMSに変更されている。

#### オリ武装情報

レールガトリングガン『5・8・1』

「レールガンガトリングにしたら強いんじゃない？」というヘルマ・ハルフォーフの思いつきの元作成。

威力・弾速・射程・集弾性能共に申し分ないが、AMSによる制御が必須。

大型プラズマ手刀『ブルーム』

プラズマ手刀の大型版。なぜ大きくなったかという点、ヘルマ以下略。

『ゲファールン』と違い、手刀の大きさが調整可能。

シュヴァルツエア・ツヴァイク

クラリツサの専用機。

外観は大体レーゲンと同じだが、多少外観がぶつとい。

#### オリ武装情報

連射型プラズマカノン『エコーズ』

『プラズマカノンを連射式にしたら強いんじゃない？』というヘルマ・ハルフ（ry

一発辺りの威力は低めだが、連射速度が地味に速い。

A M S 制御必須。

大型プラズマブレード『プルート』  
ついにブレード化。

と言っか外觀がまんまA C f aのMOONLIGHT。  
犯人は言わずもがな。



## 人物&IS設定V0・15（後書き）

礼衣・ラウラの両ISに関して言えること。

だいたいヘルマのせい。

あと武器名はBEMANIの楽曲名を参考にしていたり。

## 第十一話 護衛ミッション・1（前書き）

どうも、昨日 jub eat に 1000 円ほど貢いだにも関わらず欲しかった曲を手に入れられなかった偽桜です。

アクセス数見てみたら 50000 PV 突破しました。ありがとうございます。

10 万 PV 突破したら何かやるべきだろうか……。

## 第十一話 護衛ミッション・1

さて、『彼』こと一夏に護衛を頼まれた訳である。  
一応軍の方に確認を取った所、

『お願いだから受けといてくれ。いやマジで』

と何故かお偉いさんからも泣きつかれたので、結局受けることにした。

「……ねえ」

「何だい？」

「もしかして、うちの軍脅していたりする？」

「さあ？見に覚えがないな」

この反応は多分、いや絶対にHEIWA的なSETTOKUをしたな。

口笛吹くとか怪しすぎる。

まあ僕としても前世の友人（笑）と話したいので、別にいいんだけど。

「で、護衛の具体的な内容は？」

「少なくとも決勝戦が終わるまでは僕の側に居て欲しい。多分誘拐犯の目的は姉さんの優勝阻止だろうし、狙うとしたら多分そこまでだと思うんだ」

「りょーかい。要は近くに居ればいいんでしょ？」

「まあ簡単に言っとそうだね」

その後も一夏と適当なことを話していたら、目的地の駅が近づいてきた。

流石にそろそろまずいのでラウラを起こすことにする。

「ラウラ、起きて」

「ふにゃ……………」

ラウラはゆっくりと目を開き、

「ふにゅ」

変な声で鳴きながら抱きついてきた。

その姿が可愛すぎたのでつい反射的に抱き返す&頭を撫でる。

撫でられて気持ち良さそうにラウラが「にゃ」とか鳴いているのを見て、一夏は

「清々しいほどのバカカップルぶりだね、全く」

と呆れていた。

おいバカカップルとは何だバカカップルとは。これでもまだキスさえして無いんだぞ。

「それが本当に不思議だよ。興味深いけど、それよりもとつと爆発しやがれこのリア充」

「思考読んだ？」

一応そこら辺の訓練もしたんだけど。

「君のその緩みきつた顔を見て考えていることが解らないほど、僕は馬鹿じゃないよ」

ああ顔が緩んでいたのか。

「次からは気を付けるよ」

修正はしないけど。

「……………いや、修正しようぜ？」

||||||| side shift: 一夏

いくら言っても行動を開始しようとしなないバカップル二人をSET TOKUし、会場まで引き摺ってきた。  
後ろで二人がガタガタ震えてる気がするけど気にしない。僕のSET TOKUにKANDOUしたただけだろう。

……………この口調飽きた。素に戻そう。

さて、今回僕を誘拐してくるであろう犯人は『亡国機業』とか言うらしい。中二っぽい名前でいいね。

それで僕を狙わないんだつたらもつと良かったんだけど。

それにしても、何で『亡国機業』とかいう団体（？）は僕を誘拐しようと考えたんだろう。姉さんの優勝阻止が目的ならもつとほかの方法もあるだろうし。

この世界の『原作』は礼衣から借りた分しか読んでないから、この辺りのことは全く解らない。

そこら辺が解つてればまだ楽なんだけど、無いものは仕方がない。

まあ、ここは礼衣たちに頑張ってもらうしかないか……。

面倒だなあ。まあ全部押しつける事なんだけどね。

???????さて、二人にはそろそろ本気出してもらわないと。

|||||break shift

一夏怖い。

そんな結論をラウラと二人で身をもって体感した後、僕らは気がついてたら会場にいた。

「そついえば」

「何？ラウラ」

「あいつは誰だ？」

「ああ、まだ言ってなかったっけ？彼は織斑 一夏。去年のブリュンヒルデ『織斑 千冬』の弟で、僕の前世の友人だよ」

「そうか……って、はあ？」

をを驚いてる驚いてる。

まあ無理もないか。いくら以前に僕の人生を見たとはいえ、いきなりこんなことを言われて『はいそうですか』と頷く人はいない。まあ、事実なんだから仕方がないんだけど。

|| || || || || || side shift? :???

「まだ誘拐できないのか」

『はい、ターゲットの周囲に情報にない人間が2人ほどおり、なかなか隙を突くことが出来ていません』

「嘘をつけ。ターゲットは一人で会場に向かったのが確認された筈だぞ」

『嘘じゃないんです！本当に得体の知れない2人が……』

「まあいい。とりあえず、何としてでも今日中に攫え。さもなければ、貴様らの命は無いぞ？」

『り、了解しました。直ちに任務を遂行します』

ビッ。

「……………全く。ここに来てイレギュラーだと？」

「今回、もしかしたら失敗するかもしれない……………」



## 第十一話 護衛ミッション・1（後書き）

ニコニコで某ゲームのプレイ動画見ながらやってたらこうなった。

意見・感想お待ちします。

## 第十二話 護衛ミッション・2（前書き）

どうも、今度はボーダーブレイクに500円ほど貢いできた偽桜です。

期末前なのになにやってんだかと思ったたら負け。  
後他の二次創作のラウラが可愛すぎて辛い。

勉強？なんだっけそれ？

## 第十二話 護衛ミッション・2

「ねえ礼衣」

「なに？」

なでなで。

「君、僕の話聞いてたよね？」

「うん、聞いてたけど」

なでなで。

「じゃあ、何で君達はそんなことをしているんだい？そろそろ苛ついてきたんだけど」

「別に言われたことは守っているはずなんだけど。ねえラウラ」

「うむ。寧ろ何処に悪い所がある？」

「だからさ礼衣」

お願いだから観客席で自分の彼女を膝の上に乗せるのは止めてくれないかなあ！」

|| || || || || || ||

うるさいなあもう。ラウラを愛でて何が悪いんだか。

そう思つて無視し続けてたら一夏の泣き真似がどんどんウザくなつていったので、仕方なく僕はラウラを膝の上から下ろして決勝の試合を見ることがする。

因みに僕とラウラは他の試合も見したが、一夏の姉である織斑 千冬さんが他を圧倒していたこと以外は特に印象に残っていない。というか千冬さんの強さが圧倒的すぎる。

当然この試合でも圧倒的な強さを誇り、開始十分の今も千冬さんのIS『暮桜』はノーダメージである。相手はもう半分位しかないのに。

「そつえばさ」

「何だい？」

「君とあの人つて、どっちか強いの？」

「全く、何を当然なことを。そんな事決まっているじゃあないか」

「ああやっぱり千冬さんの方が

」

「僕の方が強いよ」

「「え」「」

それって、今回のミッション僕達必要なかったんじゃない？  
そんな思いや純粋な驚きと共に、僕とラウラは固まった。

「まあ何百回も転生したら、自然と強くなるでしょ。まあ姉さん  
もIS着けて僕とほとんど同じくらいの強さだけど」

それって、千冬さんの人外加減と一夏の非常識加減の、どっちに驚  
けば良いのかな……。

|| || || || || || ||

結局、

さすがブリュンヒルデだわー（棒

とか思っている間に試合は終了してしまった。  
当然千冬さんの勝ちで。

そんな訳で一夏と僕達は、一夏の『ちよつと姉さんに会つていこう』  
という一言で千冬さんに会いに行こうと表彰式を見ず観客席を出た  
のだが。

「なあ」

「何だい？」

「道は解つてるのか？迷つてる気がするのだが」

「ソナナコトナイヨ」

「なあレイ、こいつ殴つてもいいか？いいよな？」

「まあまあラウラ落ち着いて」

なでなで。

「ふみゅっ！？い、いきなり撫でるなああ！」

ラウラを撫でて落ち着かせ、一夏に問いかけ直す。

「で、どうせ迷つたんでしょ？」

「まあそれ以前に姉さんの居場所を知らないんだけどね。適当にそこら辺のスタッフにでも聞いてみようかな？」

多分聞けないと思うけどな……。だって、よく解らない男が突然『  
織斑 千冬に会わせろ』とか言ったら不審極まりないだろうし。

そんな考えを知ってか知らずか、一夏が近くを通りかかった男性ス  
タッフにニコニコ顔で声を掛ける。

何でいきなり猫被るんだよ……、いや別にいいんだけどさ。

「すいませーん」

「はい、何でしょうか」

「姉さんは何処にいるんでしょうか？」

「あ、それなら私が連れていきますよ」

いいのかよ。

「ついでに僕の友人達を連れていっても良いですか？」

「いえ、セキュリティの関係上、ご友人の同行はちょっと……」

「そうですか……。で、もう一つ質問しても？」

「ええ、いいですけど」

スタッフの人がそう言った瞬間、一夏がいきなり猫を被るのをやめ、  
表情を嘲りのそれに変える。

「何で僕は『姉さん』としか言わなかったのに、すぐに何処かへ  
連れていこうとしたんでしょうねえ？まるで、僕を連れていくのが  
目的みたいですけどお？」

「チツ                      ！」

元スタッフ・現誘拐犯が一夏に掴みかかるつもりだが、

「ゲボア！？」

「一夏、その口調ウザいからやめた方がいいと思うよ」

「まあ何となくやったただけだし。というか、そんな世間話をしながらその不審者をつかっ飛ばした君も大概だと思っけれど？」

「鍛えてますから」

「うわー星がきもーい」

掴みかかる前に誘拐犯を蹴っ飛ばして無力化。一応依頼なので、しっかりと仕事はこなす。

……………こらラウラ。誘拐犯とはいえ一応人間なんだから、四肢を変な方向に曲げさせない。このあとのOHANASHIタイムにやることが減るでしょうが。

ちよっと言っていることが矛盾している？気のせいさ。

さて、何か追っ手みたいな奴らも来たので、『ヴィークル』を起動してラウラと一緒に対応を開始。

一夏は「きゃーこわーい」と棒読みしながら突っ立っている。



.....少しは働こうよー夏。

## 第十二話 護衛ミッション・2（後書き）

あれ、気がついたら一夏がネタキャラに……？  
今更かorz

意見・感想お待ちしております。

## 第十三話 護衛ミッション・3 (前書き)

どうも、弐寺をやるうとして人の多さに圧倒され諦めた偽桜です。

働け一夏。

### 第十三話 護衛ミッション・3

戦闘を行いやすくするため、僕らはわざと袋小路へ移動した。

今回みたいに少人数で特定の何かを守るような戦闘の場合、開けたところで戦うよりもこっちで戦ったほうがいい……はず。敵の戦力は集中するけど、その分一点にまとまってくれるし。幸い後ろのほうには通気口のような出入りできるものもないので、前方から迫ってくる追っ手のほうに意識を集中。

まずは先行して突っ込んできた3人の足にハンドガンで銃弾をプレゼント。

バランスを崩している間に接近し、両端の二人を手刀で黙らせながら、真ん中の奴の背中を蹴って跳躍。飛んでる途中で後ろにいた4人に発砲

ヒット。

天井の照明にぶら下がり、勢いをつけてもう一度ジャンプ。一番後ろの敵集団へ突っ込んでいく。

着地ついでに一人を壁に叩きつけ、壁に手をついた反動で後ろへ移動、3人ほどを気絶させる。

ラウラのほうを見ると、向こうもこっちの集団まで辿り着いたらしい。ナイフ無双パネエ。

「一夏は大丈夫？」

「暇だからと言って後ろのほうでPFPやってるぞ」

「よし後で叩き潰そう」

そんな話をしながらも3人ほど片づけ、周りが怯んだ隙にハンドガンを連射。敵をなぎ倒していく。

……なんかスタッフっぽい人多いな。どんだけ管理が甘いんだか。

まあ他人様の管理の甘さに口出しできるほど僕は偉くもないので、殲滅行動を継続。

さつきから「ば……化け物が！」とか「撤退だ！撤退する！」とか  
いつてる声が聞こえるけれども、

「ちよいとおまちなさいな」

「ヒッ！」

逃がす気はあんまりなかったりする。

(組織的な意味で) オーバーキルは男のロマンでしょ、うん。

|| || || || || || || ||

3分後、周囲にはまともに動けるような敵がいなくなったので、  
夏のほうへ声をかけることにする。

「一夏、無事かい？」

「ちょっと待ってもう少しでこの曲クリアできそうだk」「黙れ」「  
すみませんでした」

一夏が綺麗なジャンピング土下座をする。

そんなことやるんだったら初めからこんなところで音ゲーなんてし  
なければいいのに。

「まあいいや、一応全員殲滅したよ」

「うん、多分実行部隊はこいつらだけだろうし、後は念のため僕と一緒に行動するだけでいいよ」

「すげー面倒だから帰りたいんだけど」

「却下」

「うわー星がきもーい」

「君が先に言っただろう？」

「まあね」

そんな話を話していると、敵数人とOHANASIしてきたらしいラウラがこっちに来了た。

「なにか情報聞き出せた？」

「いや、あいつらがただの下っ端だったせいか、あまりいい情報は無かった。聞き出せたのは、依頼を寄越した集団が『機業』、依頼人の名が『S』という事だけだ」

「いやいや、それで十分だよラウラさん。ありがとう」

一夏がラウラの頭を撫でようとするが、その前にラウラが一夏をかつ飛ばす。

「レイ以外が私を撫でるのは許さん」

…… 拗ねた顔でそんなことを言われたら撫でずにはいられない。  
死屍累々の中僕がラウラを撫でているシニカルな光景は、結局一夏  
が復活するまで続いた。

「 side shift? : ? ? ?

「おいどうした、応答しろ!」

どこか暗い所で、誰かが叫んでいる。  
しかし返ってくるのはノイズ音だけ。

それは、送り出した部隊の全滅と、作戦の失敗を示していた。

「あれだけの数を送ったにも関わらず全滅とは……」

誰かがぼやく。

「一体、何が起きた?」

### 第十三話 護衛ミッション・3（後書き）

そついや一夏のヒロインどうしようかな……。

一応簪にする予定なんですけど。

あとこのままだと簿の原作ログアウトフラグが立っちゃいそつです。

……いつかアンケートちゃんと取ります。

意見・感想お待ちしてます。



#### 第十四話 護衛ミッション・4（前書き）

どうも、流石にテストが近づいてきて焦っている偽桜です。

キャラ崩壊上等。

#### 第十四話 護衛ミッション・4

一夏復活後。

僕たちは、改めて千冬さんの所に行ったのだけれど。

「姉さん」

「一夏！」

この猫被ってるバカとブラコンをどうにかできないものでしょうか。何で出会った瞬間僕とラウラ全スルーで抱き合ってるんだよ、うん。なんか見ているこっちが恥ずかしい（自分もさっき似たようなことをやってたの自覚してない）

「さて、挨拶は程々にして」

「そうだな」

いきなり素に戻りやがった。突っ込む気力もないのでスルー。

「そういえば一夏、後ろにいるのはお前の友達か？」  
「やっ」と僕らに意識が向いた。

「ああうん、彼らはバカッフル兼僕の友人だよ」

おいちよつと待て。  
それどんな紹介だよ。

「ちょっと待て。私達はバカップルではないぞ」

「嘘ダツツツッ！」

「ひぐらしネタは古いと思うぞ？」

「そうかい。というか良く元ネタが解ったね。そっちの方が僕としては驚きだよ」

「副隊長に昔借りた」

クラリツサさああああああん！

「で、お前達は一夏の友達なんだな。いつも一夏が世話になってい  
る」

千冬さんが話を戻してくれた。ナイス。

「いえ、僕は今日久しぶりに会っただけですし、ラウラは一夏と初  
対面ですから」

「そうか、すまない。そういえば自己紹介がまだだったな。織斑千  
冬だ」

「御刻礼衣です」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

こらラウラ。年上なんだから敬語使いなさい。

ぺしっ。

「ふにつ!?!」

「敬語使おうね」

「わ、わかった……」

「別に私は気にしないぞ。むしろ面白ささえ感じる」

その『面白さ』の結果何が起きるか解らないから怖いんじゃないですか……。

「そういえば、お前達さつき襲われたらしいな。大丈夫だったか？」

あ、やっぱり情報来てたか。

まあ結構派手にやったから、誰かに見られていても仕方がない。

「大丈夫、ただの誘拐未遂だったから安心して姉さん」

「誘拐未遂はかなり大きい事件だろうが。心配したんだぞ」

「というか礼衣たちに全員排除してもらったし」

「……お前も戦ったのか？」

「後ろでゲームしてた」

「馬鹿者」

「すみませんでしゅギヤアアア！」

一夏が青筋を浮かべた千冬さんにかっ飛ばされた。

…………… 本当にこいつ千冬さんより強いのか？

まあどうでもいいんだけど。

|||||

一夏がどっか飛んで行ってしまったところで、千冬さんが謝ってきた。

「すまないお前たち。うちの愚弟が迷惑をかけたな」

「いえいえ、一夏には昔お世話になりましたから。気にしないでください。それよりも、今回僕達が関わったことを伏せておいてくれると嬉しいんですけれど」

あまり目立ちたくないからね。

「そんなことならお安い御用だ。今回は本当にすまなかった」

「だから気にしないでいいですって。では僕たちはこれで失礼します」

「ああ、ちょっと待て。失礼だとは思うが、一つ頼みたいことがある」

「いいですけど、何でしょう?」

僕がそう問い返すと、千冬さんはいきなり頭を下げ、

「一夏の接し方を見ている限り、あいつにとって本当に『友達』と呼べる人間は、多分お前達だけだ。だから、これからも一夏をよろしく頼む」

ああ、そういうこと。

確かに一夏、自分の興味対象じゃない人には上辺だけ優しくして心を開かない人間だからな……。まあここは無難に、

「お安いご用です」

とでも答えておこう。後々面倒だろうし。

「すまない、本当に感謝する」

「だから別に気にしなくて良いですって。では、そろそろ帰りますね」

「ああ、またいつかな」

別れの挨拶をして、迷惑をかけないようにとっとと撤退。

……まあぶつちやけとつと帰ってたただけだったりする。  
決して千冬さんの後ろに縛られてる一夏が見えた訳ではない。

……深く考えないようにしよう。うん。

#### 第十四話 護衛ミッション・4（後書き）

明日か明後日辺りにアンケート取ります。

後来週はテスト期間のため多分毎日投稿できません。  
頑張って二日に一本ぐらいになります。



## 第十五話 ある日の訓練風景・そのに（前書き）

どうも、期末前日なのに何やってるのかわからない偽桜です。

千冬さんはブラコンじゃないよ！ドSなだけだよ！

## 第十五話 ある日の訓練風景・そのに

oooooooooooo

礼衣達が去った後のお話。

「あの……姉さん」

「何だ」

「何故に僕は縛られているのでしょうか？」

「聞きたいことがある」

「それ縛る必要ない気がするんだけど」

「気のせいだ」

「ええー……で、聞きたい事って？」

「あいつ 確か礼衣だったか？いつ、何処で知り合った？私の知る限り、全く覚えがないぞ」

「……………別に良いじゃない、そんなこと」

「ほう、どうしても言わないつもりか。なら……………」

「あれ何で姉さんなんかそんな怪しい物もって近づいてるのうわやめろ襲われ」ギヤアアアアアアアアアア！」

……………何で助けられなかったんだよ、礼衣。

oooooooooooo

一夏の護衛をしてから、1週間後。

日本から帰ってきてからは、帰った直後僕らが同人誌を持ってこなかった事に絶望したクラリツサさんが暴れ、ヘルマさんの『私のコレクション貸すから落ち着け』という一言で落ち着くまでに施設が滅茶苦茶になった事件や、ラウラと一緒に寝るようになった事以外は特に変化がない。

というかラウラとの関係も他の隊員の妨害でキス以上に進まない。  
クラリツサさんマジ消し飛べ。

そんなある日の朝。

僕は何故かいつもより早く起きた。理由は知らん。

まあでも、いつもほぼ同時に起きているラウラの寝顔を堪能できるのでよしとする。

それにしても、

「にやう……………すう」

……………ラウラの寝顔が可愛い。

ちなみに今現在ラウラは僕に正面から抱きつく形で寝ている。流石に全裸ではなく下着（下のみ）とワイシャツ（提供：ハルフォーフ母娘）を着ているが、十分破壊力は高い。

そんなラウラを見ていたらちよつと衝動が押さえられなくなってきたので、まずはラウラを抱き返す。

「うにゅ……………にう」

僕が抱き返した事に反応したのか、ラウラが身をよじる。

……………やばい、僕のナニがラウラの腹に当たって反応し「以下自粛」。

しかもそんなタイミングで、

「ふぁ……………」

ラウラが起きてしまった。  
となると、当然僕の「自粛」なナニが当たっていることに気がつく  
わけで。

「れ、レイ……………」

「いやこれはしかたがないといつかなんといつかその」

ラウラが頬を真っ赤に染める。  
そしてうまい言い訳ができない僕。

「……………ふにゅう」

結局、ラウラが恥ずかしさのあまり目を回して倒れてしまった。反  
省。

ああ、そういえば、

「……………残念、あと一歩でしたか」

「おいクラリッサ、声が大きいぞ」

「大丈夫ですよ母さん。これぐらいならばね」ばれてますよクラ  
リッサさん」あ、あら……………」

「ほーら言わんこつちやない」

何て会話をしながらクローゼットの中に隠れていた不審な二人にO  
H A N A S I するのは忘れないでいた。

|| || || || || || ||

朝食の間ずっと頬が赤かったラウラを落ち着かせ、何時ものように訓練に参加。一応この隊のリーダーはラウラだが、経験の多さからいつも訓練はクラリツサさん主導でやっている。

今回の内容はISの点検・整備・調整。非常時には自分でできるように、ということらしい。

他の隊員達は隊所有のISの、僕とラウラとクラリツサさんは専用機の整備等をする予定だ。

ちなみにクラリツサさんの専用機は『シュヴァルツェア・ツヴァイク』。製作者は当然のごとくヘルマさんである。

AMS & amp; AIC搭載で、主武器は連射型プラズマカノン『エコーズ』と大型プラズマブレード『プルト』、あと8本のワイヤブレード。ヘルマさん曰く、『愛娘だから特に本気出した』らしい。僕とラウラの機体もそうだが、これでよくエネルギーが持つな、とか思ってしまう。ラウラの『5・8・1』なんかかなりエネルギー食いそうなのに、どういう訳か全然減らないらしいし。

思考放棄。

まあそんな訳で、隊のみんなでISを整備室に運び、作業を開始する。

内部アクセス用のケーブルをIS本体に繋ぎ、コンソールを起動。

早速スラスターの出力でもいじろうと思ったのだが。

「イヤアアアアアアアアホオオオオオウ！」

何かヘルマさんが突っ込んできた。

「貴女普通の登場できないんですか……」

「無理だ」

さいですか。

「で、何かあったんですか母さん」

クラリッサさんが会話を進める。

「いや、コンソールでは操作しにくいと思ってな。これを用意した」

僕とラウラとクラリッサさんに渡されたのは、何だかよくわからない端末。何故かAMS端子っぽいものについている。

「AMS経由で直接ISの調整を可能にする端末だ。パネエぞ」

パネエて何だ、パネエて。

まあせっかく渡されたものなので使ってみる事にする。

ケーブルを端末に繋ぎ、端末を僕の首の所にあるAMS端子にセット。今度こそスラスターの調整を始める。

何処かの偉い人が「当たらなければどうってことはない」とか言っていた気がするので、単純に出力を上げようとしたんだけど。

「え、なにこの『ジェネレータの出力が足りません』って文字」

「私にも出たぞ」

「私もです」

え、みんな速度上げようとしてたの？

いやまあいいんだけど。

あとISってジェネレータみたいなもの積んでないよね、確か？

まあどちらにせよ皆同じメッセージが出たのは変わらないので、開発者であるヘルマさんに目線を送ると。

「ああ、そう言えばA C f aハマった時にそんなものを積んだ気がするな……」

え、マジ？

これ積みばほとんどのISのエネルギー関連の問題解決するよね？

そんな僕らの考えを安心させようとしたのかは知らないけれど、

「AMSないところに制御できんがな、処理能力的な意味で」

と補足された。

人の脳を高性能コンピュータがわりに使わないでください。いや本当に。

まあそんなことがあった以外は特に事故もなく、今日一日は平和に



過ごせた。

……へいわっていいね。

|| || || || || ||

寝る前の一幕。

「うにゅ……………」

「どしたのラウラ」

「今日私空気だった……………」

「大丈夫、僕はちゃんとラウラのこと見てたから」  
「なでなで。」

「ならいい……………にゅ」

「じゃあ、おやすみ」

「  
に  
ゃ  
.....  
」

.....  
バカップルとか言うな。

## 第十五話 ある日の訓練風景・そのに（後書き）

真ん中辺りかなりお粗末でも気にしない。

あと10万PV突破しました。ありがとうございます。

意見・感想お待ちしております。

……あ、明日アンケート取ります。

## アンケート

どうも、睡眠薬とカフェイン剤を取り違えて飲んだ偽桜です。  
今日は昨日も予告したとおり、アンケートを取ります。

内容：一夏×？について

一夏のヒロインどうしましょう、と言うことについてです。  
ぶっちゃけ全然考えてなかったので、どうしようか悩んでいます。  
一応作者としては簪にでもしようかな、と。

選択肢としては、

・簪（野鳥獣さんが既に1票入れてくれました。感謝）

・セシリア

・シャルロット

・鈴

・箒

・その他（のほほんさんとか会長とかその辺り）

という感じです。

あ、あとジェットエンジントーマス 様からの提案で

・一夏『が』ヒロイン（要は礼衣×ラウラ&一夏になる予定）

と言う選択肢もあります。

アンケートの回答に関しては感想欄の方をお願いします。

期限は十分に回答が集まったと作者が判断するまでです（この先原作突入までどのぐらいかかるか解らないので）。

今回のようにストーリー展開の一部を読者のアンケートに投げるほど発想が貧困な作者ですが、これからもよろしくお願いします＆回答お願いします。

## 第十六話 ある日の訓練風景・そのさん（前書き）

どうも、期末試験がやっと半分終わって今日は休みの偽桜です。

文章グダグダでもしかたない

きまつたもの（ 明後日の方向向きながら ）

## 第十六話 ある日の訓練風景・そのさん

~~~~~

すずー。

「ふう………」

ずぞぞぞ。

「……………え、このコーナーまだあるの？」

メタ発言は禁止です。

「解ったよ……………。まあいいや、それなら適当に『アレ』のフラグでも立てますか」

~~~~~

IS整備訓練があつた次の日、朝起きると。

「ん……………」

目の前にラウラの顔があった。

「うわっ!？」

「にやっ!？」

思わず驚いて飛び退いてしまった。そのせいでラウラもバランスを崩す。そのままベッドから落ちてしまいそうだったので急いででラウラを支える。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫だ……………それより、いきなり飛び起きるな。驚くだろう」

「起きたときにラウラの顔が間近にあったから、つい驚いて。何であんな所に？」

「たまたま私が先に起きてしまつて、あと……………」

ちら、とクローゼットの方を見る。なるほど、今朝はハルフォーフ母娘が居なかったのか。

「ごめんねラウラ」

なでなで。

「むう……………な、なら……………」



ん、とラウラが唇を突き出したとき、その物音は聞こえた。

「……………side shift：ハル<sup>バカ二人</sup>フォー母娘

礼衣とラウラの部屋の天井裏で、蠢<sup>バカ</sup>く影が二つあった。その影<sup>バカ</sup>たちは、天井の穴からじつと中の部屋を見ている。

突如、その影<sup>バカ</sup>たちが小さな声を上げた。

「ああ惜しい。後もう一步だったのだが」

「『いつ私達がいつもそこから出てくると言った』作戦は成功ですね。後はこつそりこつから覗き続ければ、いつか二人は……。そういえば母さん、ちゃんと録画用のビデオカメラは用意してますか？」

「当然だ、ちゃんとここへヘーソンナコトシテタンダ」何、行動が速すぎる！」

「マツタク、貴女たち八何ヲヤツテイルンデスカ」

「あのですね礼衣さん、これには深い訳g「問答、無用！」ギヤアアアアア！」

……………結局、二つの影<sup>バカ</sup>たちは礼衣にOHANASIされた。

これで訓練の時には復活しているのだから驚きである。

「……………break shift

さて、今は真冬である。

真ん中の冬と書いて真冬である。

が、何故か僕は軍施設の無駄に広くて深いプールにいる。しかも屋外の。

このプール何と広さは200m四方、深さは5mもある。半端ない。まあでもプールである以上今日は泳ぐんだろうが、なぜこんな真冬に水泳なのか。まあ確かに実戦ではそんなこと言ってられないけどさ。

気のせいか他の隊員も不満顔だ。

……………おい誰だ今ぼそつと『今日はニコニコしたかった』って言った奴。お兄さん怒らないから出てきなさい。

この隊にまともな女性は居ないのか……あ、ラウラがいた。

「礼衣さん、バカップルの思考はいい加減にして下さい」

「だが断る」

ラウラ可愛いし。

「で、副隊長。今日の訓練内容は？」

隊員A（名前知らない）が質問をする。

何で名前を知らないのかって？だって必要以上に他人の名前覚える気がしないし。ぶっちゃけ邪魔。

まあそんなことはいいとして、クラリツサさんが説明を始める。

「今日ですね、皆さんの予想通り着衣泳

」

ああやっぱりか、と思った矢先、

「だと思っただか！これだよ！」

何かプールの水中から変態と共に大量の水に浮かぶ足場が出てきた。  
どこにこんな物を隠すスペースがあったんだろうか。

「はい、ということで今日は『ドキッ！？女子だらけの水上乱戦！ポロリ？ねえよ！』です」

「『『『『『ナ、ナンダッテー！』『』『』『』」

何かいきなりよくわからない闘いが始まりそうになっていた。後ク  
ラリツサさん、星黒くなってるから。

まあ『女子だらけの』なら僕は除外だろうから、安心できる。

「何言ってるんですか、礼衣さんもですよ」

.....あ？

|| || || || || ||

『これ訓練なの！？』とか『本当にヤリタカタダケーじゃないですよねえ！？』とか非難が噴出したが、結局全員が渋々用意を開始した。

ちなみにルールは簡単。水の中に落ちたら負け。制限時間は十五分で、終了後生き残った人以外はヘルマさん特製『なんかパネエランニングマシン』を50分間やらされるらしい。殺す気か。

武器はゴム弾入りの銃器全般、刃を潰したナイフのみ使用可。

IS含めて今までに結構銃器は扱ったが、何だかんだで扱いやすい拳銃が僕には合っていたので迷わず拳銃を選択。

……………うおいラウラ。いくらISで使っているからってガトリングガン選ぶのは無謀でしょ。  
というかよくあったなゴム弾ガトリングなんて。

「私が作った」

解りましたからヘルマさん、ドヤ顔はやめてください、ウザいから。

「ではみなさん、それぞれ指定の位置に着いて下さい」

クラリツサさんの指示で、全員それぞれに割り振られた浮島に乘せられた。

ヘルマさんの号令でスタートらしいので、ヘルマさんが一定以上の声の大きさを出したら動けるように『ヴィークル』で条件反射をセツト。

ヘルマさんが大声を出そうと息を吸い、

「では、スタート……………とでも言うと思ったか！」

「のわっ!？」

あ、やばい。

今の大声で体が反応してしまった。  
と思ったときにはもう遅く、

「あーーーーー！」

ざぱーん。

「レイーーーーー！」

プールに落下してしまったよ、うん。  
真冬の水って冷たいね。本当に。

……当然、その後僕は風邪を引いた。  
いや、ラウラに看病して貰ったのは嬉しかったけどさ。

## 第十六話 ある日の訓練風景・そのさん（後書き）

最後の方特に力抜いた

アンケート途中経過。

簪 6票

のほほん 2票

一夏がヒロイン 1票

シャルロット 1票

結構多く集まってます、ありがとうございます。

この調子でいけば今週末には締め切るかもしれません。

引き続き、アンケートの回答と意見・感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5945y/>

---

IS -隊長補佐の憂鬱-

2011年12月7日09時48分発行